
姉上様の謀略

七崎 雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姉上様の謀略

【Zコード】

Z3828Y

【作者名】

七崎 雨

【あらすじ】

唯一の肉親である弟は幼いころ、王子に顔が似ているからというだけで影武者として城に連れて行かれた。残された姉は泣き寝入りするしかない、と思いきや……「見てなさい王子、今に吠え面かかせてやるわ!」 いつの間にか地位も能力も最強になっていた姉が、なんか不憫な王子を怒鳴り散らす話。

1 1 姉上様はかく語る

国というのは、厄介なものだ。

シアンは溜息を一つつくと、馬車の窓から外の景色を見渡した。ここには、今まで暮らしていた田舎とはまるで比べものにならないほど、人も物も多い。

彼女は長いまつげを数回しばたかせると、その景色をしつかりとその瞳に焼き付けた。目線を上げるとそびえ立つのは、大きな城。僅かに瞳を細め、彼女はそれを睨むように見上げる。

自分が魔術師であると気付いたのは、10を数えた時だった。何気なく貸本屋で借りた魔術書を読んでみたところ、いとも簡単に魔術を使いこなすことができた。魔術書の文字は魔力のある『ぐく一部の者にしか読むことはできず、さらに魔法陣は、形を知つても文字を描くのに用いる媒体、たとえばチヨークや、指先なんかに魔力を乗せることができなければ、永遠に発動しない。

魔力を持つて生まれてくることですら珍しいのに、それをすぐに使いこなすことができる者など、片手でも多すぎるくらいに少ないのだ。つまりところ、シアンは天賦の才に恵まれた子だった。

それからは、死に物狂いで勉強をした。本を読み漁つて、魔の森で修業をして、効果があると聞けば滝にも打たれた。その成果か、18になるころにはその名を国中に轟かせるほどの魔術師になり、ついに國からの要請も受けた。國同士直接の争いはもう何十年も起きていないが、それでも暗殺や謀略のはびこる世である。特に『先読みの力』に長けたシアンのことを欲しがっているのは、この国だけではない。牽制し合つてギリギリ均衡を保つていて今、『先読みの力』はどんな剣にも代えがたい力なのだ。

実際シアンも何度か追手に出会つたことがあるが、先読みのでき

る彼女にとつて、その追跡をかわすことは造作もなかつた。そして今日、シャンはこの國お抱えの魔術師となる。

「ふふ……やつたわ、ついにやつたわ。……見てなさい、王女」
シャンは王からの文を賜つたその日、透き通るよつた緑色の瞳にほの暗い喜びを滲ませていたのだった。

「魔術師様、到着致しますのでござ用意をお願い致します

「わかりました」

従者の声に答え、彼女はフードを被る。
すぐに扉が開かれ、外へ降りる。整然とした石畳が敷かれ、左右に多くの兵が立ち並んでいる。

「すげー、あれが『先読みの魔女』か?まだ子供じやねーか

「魔術師だからな、歳ぐらいこまかしてるとかもしんねーぞ」
ひそひそと兵士の話す声が耳に届く。シャンが少しだけ顔を上げると、ぱちりと目が合つてしまつた。

「あ、いえ、なんでもございませ、あつ!」

責ざめてそう弁解した兵士が手にしていた護衛用の槍を、石畳の上に落とした。金属のぶつかる高い音が響き渡る。

「おい、なにやつてんだよ!」

「う、すみませ……」

シャンは慌てる兵士にゅうくじ近寄ると、従者の止めるのも聞かずその槍をそつと拾い上げた。

「あ……」

「ふふ、そんなに慌てないでください。どうぞ」

シャンはにつこつと微笑んで、兵士の手に槍を戻した。

「あ、ありがとうございます……」

「いいえ」

翠の瞳がふわっと細められ、フードの間から金髪がせりつとこぼれる。

摘みたての花のようなその笑みに、声を掛けられた本人だけでなく、周りの兵士たちもが目を見開いて硬直した。

シアンは従者その後ろに戻つて、それから思い出したよつてくぐりと振り返つた。

「そうそう、言い忘れていましたけれど、私この前18になつたばかりですよ？」

悪戯っぽくふふ、と笑うシアンを見て、兵士たちは初心な乙女のようになつてくぐりに顔を染め上げたのだった。

「魔術師様、こちらへどうぞ」

シアンは無言のまま後に続いた。

城の中は煌びやかで、靴で踏んでいる赤い絨毯は明らかにシアンの部屋の毛布よりも上等だ。毎日あれにくるまつて寝ていた自分がとんでもなく滑稽に思えてくるが、そうではない。こここの奴らがかしいのだ。

シアンには弟がいた。弟のディスはやんちゃだが優しい子で、幼くして両親を失つた2人はとても仲が良かつた。一緒におままでもしたし、追いかけっこもした。かくれんぼで自分のことを見つけられず、泣き始めてしまつたことはしばらく弟をからかうときの種になつていた。多くの一般国民がそうであるように、自分と弟も王族に関わることなど当然ないと、その頃のシアンは思つていた。国から使いが来たのは、シアンが6つ、ディスが4つの時だつた。ディスは初めて間近で見る騎士たちに興味津々だつたが、シアンはなぜだか不安でたまらなかつた。もしかすると昔から勘の利く方だつたし、この頃から無意識に先読みの能力が使えていたのかもしない。

使いの言つには、ディスをこの国の王子、クリス・ヴィン・アレリックの影武者として城に迎えたいということだつた。年の頃も背丈も外見も似通つていて、親もない孤児院育ちのディスは、影武者

の条件にぴたりと当てはまつてしまつた。

城ではもうディスが迎えられることは、ほんんど決定事項だつた。シアンがどんなに泣いても喚いても決定が覆ることなく、弟は数日の後城へと連れて行かれた。

「ねーちゃん、おれ城でもがんばるから、ねーちゃんも泣くなよ？
てがみかくからさ！」

そう笑つて言つたディスの姿を忘れたことは、ただの一度もない。

王子の影武者と言つのはずっと昔から続いているもので、王子がまだ幼い時だけ、代わりとして影武者が人前に出る。しかし一度影武者として城に入つたものは、重要機密を知ることになるため、役割の終わつた後も生涯城から出ることは許されない。孤児院はディスのおかげで潤つたし、シアンも勉強に励むことができたが、ちつとも嬉しくは無かつた。

弟に会いたかつた。自分とよく似た顔立ちが、屈託なく笑う姿を見たかつた。大きくなつた弟のことを、どうしても一目見たかつた。「どうして、私が遠慮しなきゃいけないのよ。何が一目会いたいよ、ふざけんなつての。姉が弟に会つのに理由なんているか！ 一目も一目も会わせろ！」

そう叫んだ瞬間、彼女は閃いた。そつか、弟が出られないのなら、私が行けばいいんだ。

そこからは人の変わつたように勉強し、偶然手にした魔術書を読みふけり、彼女は歴史に名を残そうかといつほどの大魔術師になつたのだ。

1 2 姉上様はかく語る

「クリスヴィン王子、魔術師様がご到着なさりました」「莊厳な扉の前、使いが大きな声で私の来訪を伝える。

「入れ」

「低くよく通る声が、部屋の中から響いた。 王子だ。

「失礼いたします」

使いの後に続いて、部屋に入る。謁見の間にはピンと張りつめた空気が漂っていた。シアンは顔を伏せたまま王子の御前まで歩き、無言のまま両膝をつく。問われていないのに勝手に話すことは、王族に対して失礼にあたるからだ。シアンは叩きこんだ礼儀を尽くして、王子の顔を見たいと逸る心を押さえた。

「魔術師殿、長旅ご苦労だった。どうぞ顔を上げて楽にしてくれ」王子の声が頭上に降ってくる。シアンは出来るだけ恭しくフードを取り、エメラルドの瞳を露わにした。

ほつ、と謁見の間に、護衛やメイドたちの感嘆の息が漏らされた。シアンは普段魔術師らしくその姿を簡単に晒したりはしないが、その姿を見たものはみな口を揃えて、女神のごとき美しさであった、と彼女を語るのだった。

これからは好きだけ、王子の顔を拝むこともできるのだ。シアンはすぐに王子の顔を眺めるような無礼な真似はせず、瞳を伏せたままに薄く笑みを浮かべた。

「有難きお言葉頂戴致します。白の魔術師、シアン・ミストラルと申します。この度は王子殿下直々の……」

シアンが口上を述べようとしたとき、王子のすぐ後ろに控えていた一人の騎士が首を傾げた。

「姉ちゃん……？」

きょとんとこちらを見つめるヘーゼルの瞳と目が合つと、シアンは一度大きく目を見開いたが、あくまで落ち着いた様子を装い笑つ

た。

「久しぶりね、ディス」

「姉ちゃん、やっぱ姉ちゃんだろー…」「わー、何してんだよこんなとこまで来て！」

ディスは昔のままの懐つこい笑顔を輝かせ、シアンに駆け寄った。
「悪い、みんな下がつてもらえるか。この人は俺の姉だ、王子に害なすような真似はしない。俺が責任を持つ」

ディスは控えている騎士たちにそう声を掛けた。

城へ上がるというシアンの計画は面白いほど思い通りに進んだが、ただ一つ想定外だったのは弟が騎士、それもかなり位の高い、王子付きの護衛騎士になつたことだった。

通常影武者として城に迎えられたものは、一生をほぼ幽閉される形で終える。贅の限りをつくす代わりに、自由を奪われて死んで行くのだ。

しかしディスは、影武者時代に学んだ剣術が思いのほか成果を出し、年若くして教師を打ち負かしてしまつほどの腕前を見せた上、12の時には御前試合で優勝してしまつた。影武者が御前試合に出ることさえ異例の事態だったが、成長とともに運良く顔立ちも背丈も王子とは離れていつたため、特別にある程度の自由が認められたのだといつ。

影武者の存在を知つて一部の者たちはディスの扱いに悩んだが、間違いない腕が立ち、その上国の大機密事項を知つてしまつてゐる彼である。下手に扱うくらいなら騎士として城に縛り付けておいた方が安心だと思ったのだろう、ディスは史上最年少にして王子付きの護衛騎士という、人に言わせると大変名誉な役職を賜つたのであつた。

ディスの言葉を聞きどうするべきかとつらたえる騎士たちに、クリスヴァインが『いい、下がれ』と命令した。騎士たちは短く返事を

し、メイドも頭を垂れると、美しく列を成し謁見の間を後にした。ギィ、と重苦しい音を立て、扉が閉められる。それを確認すると、シアンは顔を綻ばせた。

「ディス、久しぶりね！もう、こんなに大きくなっちゃって！」

昔の面持ちを残しながらもすっかり大人びてしまつたディスを見て、膝をついたままシアンは王子のことなどそつちのけで言つ。「姉ちゃんもすっかり女らしくなつちゃつて、つていうか先読みの魔術師つて姉ちゃんのことだつたの！？教えてくれればよかつたのに」

「ふふ、驚かせたかったの」

ディスは手を取つてシアンを立ち上がらせると、思い切り抱擁を交わした。12年間手紙でしか会話を交わすことはできなかつたので、騎士らしく引きしまつた腕も、自分より随分伸びてしまつた身長も、嬉しくて、切ないものに感じた。

「ほらクリス、俺のいつつも言つてる姉ちゃん！美人だろ！？」

ディスが肩を掴んで、見せびらかすように王子に姉のことを向かい合わせた。そこでシアンは初めて、王子の姿を目にすることができた。

透き通るような金の髪に、ヘーゼルの瞳。弟とパーシは似ているが、騎士である弟に比べると肌が白くやや細身で、どことなく影のある、纖細そうな面持ちをしている。ガラス細工のようだと巷で囁かれているのも頷けると、シアンは思つた。

「ディス・ミストラルの姉、シアン・ミストラルでござります。お目にかかる光榮です」

「ああ、ディスからよく話は聞いていた。まさか名高い先読みの魔女が、その姉君とは夢にも思わなかつたが。ディスには世話になつてゐる。魔術師殿も何か必要なものがあれば、遠慮せずに言ってくれ」

王座に腰掛けたまま、クリスヴィンは言った。弟の手紙にあつたように、王子と弟は親しいらしい。

「有難あお言葉に御座ります。では一つお願ひしても宜しこうか」

シアンが頭を垂れて言つと、王子はなんだ、と耳を傾けた。

「少しばかり、殿下のお時間を頂けないでしょうか。この先の私の務めについて、いくつかお聞きしたいことがあるのですが」
シアンが言つと、王子はいささか拍子抜けしたかのように、しかしすぐにまた引き締まつた表情に戻つて言つた。

「そんなことか、いくらでも言つがいい。ディス、ついて来てくれ。話なら私の執務室で聞こつ」

王子が立ちあがつて、階段を下りる。ディスの隣に並ぶと、王子の方が幾分背が低く華奢で、2人はもうあまり似ていなかつた。

「いらっしゃへ

「行こうぜ姉ちゃん」

謁見の間を出、広すぎる廊下を静々と歩く。ディスの立ち居振る舞いは上品を溢れるクリス、ヴィンのそれとは違い、あくまで騎士らしいものだった。きっと意図的にそうしているのだろう。

シアンは弟を見て、少しだけ寂しそうに笑つた。

1 3 姉上様はかく語る

王子はディスとシアンを執務室へ通すと、人払いをするように申しつけた。

机の上には大量の書類が乗せられており、壁には本が並んでいる。腰に剣を差しているし、一国の王子なのだから剣技もできるのだろうが、普段はここに机に向かっているのだろう。

「そちらへ座つてくれ。私は魔術師の礼儀などはよくわからんのだ。魔術師殿も堅苦しく思わず、思うことがあれば言ってくれ」執務室の椅子にゅつたりと腰掛け、王子はシアンに促した。その横にディスも控える。

しかしシアンは何故か返事をせず、腰掛けようともしない。ただ突つ立つたまま、黙つて下を向いていた。

「どうした？ 魔術師殿」

クリスヴィンが怪訝そうに眉をひそめる。ディスもおや、と首を傾げた。

「姉ちゃん？」

シアンは俯いて、細い肩を震わせていた。真っ白いローブの上に、金の縄糸のような髪がかかる。

「…………」

何かぶつぶつ呟いているが、よく聞こえない。クリスヴィンが、「おい、どこか具合でも……」

とメイドを呼ばうとしたとき、シアンの顔が上がった。顔中に、恐いほど美しい、黒い笑みを浮かべて。

「ついに、ついに来たわよー見たか、この私の意地をー今日までの血の滲む努力、汗と涙と泥水の日々、全ては今日のためだわー！」

「な、なに……？」

クリスヴィンがあまりの彼女の変貌ぶりに、ついていた頬杖を滑らせた。ディスもぽかんと口を開けて、姉を眺めている。先ほどま

でのしとやかで美しい彼女は、一体どこへ消え失せたのか。

困惑する2人をよそに、シアンは手にしていた杖をひとつ王子に向けると、敬意も恭しさも消え失せた態度でのたまつた。

「あんたは私の顔も知らなかつたんでしううけどね、私は初めて新年祭に行つたあの日、遠目でその顔を一目見た時から、あなたの顔を一度たりとも忘れたことは無かつたわ！私の弟を身代わりにして生きてきたあんたのことをね！」

クリスヴィンが事態についていけず、呼吸を忘れ目を見開いている。

尚も怯まず、シアンは王子である彼にこう続けた。

「残された私がどんな気持ちで毎日過ごしてきたかわかる？たつた1人の身内がいつどうなるかもわからないのに何もできないこの気持ち、あんたに理解できるかつて聞いてんのよ！ 孤独に耐えて、必死に学んで、そして私は掴み取つたわ、自分の幸せをね！」

狂気さえ滲ませて、シアンは笑みを浮かべた。

「…………」

クリスヴィンは無表情のまま、呆けたように姉を見ている。

それまで驚いて黙つていたディスだったが、さすがにまずいと思つたのか、ほんのり苦笑いを浮かべて口を開いた。

「ね、姉ちゃん、俺は結局死ななかつたし、こうして騎士になることもできた。クリスは王子とは思えないほど俺に良くしてくれて……」

「…………」

「黙りなさい！」

シアンが、がん、とすごい音を立てて杖を床に打ちつけると、ディスは『はい……』と引き下がるしかなかつた。昔から姉に口喧嘩で勝てたことは、ただの1度も無かつたのだ。

「ディスが死ななかつたのも騎士になれたのも、全てはただの結果でしかない。偶然この子の顔があんたと似なかつたってだけよ！ もしそうじゃなきゃ、ディスは騎士になることも許されなかつた。そういうでしょ？」

「……そうだ」

クリスヴインは押し殺したような声で答えた。正にその通りだつたからだ。

「あんたは私の弟の人生を自分のものにして、そのくせ姉である私の顔も知らず、金だけ渡せば満足するとでも思つてたわけ？ふざけんじゃないわよ！」

シアンは蛇でも睨み殺しそうなほど視線でクリスヴインを見据える。

弟が自分の運命を今や受け入れていることは知つていた。そんなものじゃないのだ、この怒りは。

「歴史的に続いてきたことだかなんだか知らないけどね、そんなの私には関係ない、その時代でそうなつた人が、勝手に怒ればいい！私は今、この制度がどうとか弟のためとかじやなく、私があんたにムカついたから怒つてんのよ！仮にもあたしの弟を身代わりにしようつていうんなら、三つ指ついて挨拶に来んのが姉への礼儀つてものでしようが！」

もはやクリスヴインもディイスも、何も言わずに固まつているだけだった。シアンはふん、と鼻を鳴らすと腕を組んで一転、睨まれただけで凍りついてしまいそうなほど冷やかな表情になり、クリスヴィンを見下ろす。

「私のこと、不敬罪にでもなんでもするがいいわ。まあ、あんたの個人的なプライドが傷つけられることと、『先読みの魔女』を失うこと、どちらがより痛手になるか考えてみるのね。　ディイスに何かしてみなさい。この城一つくらい飛ばすのなんて、私には造作もないことよ」

最後だけまた恐ろしく眉を歪めて、置物のように黙つているクリスヴィンを睨みつけた。

一度この男に怒鳴つてやらねば気が済まなかつた。城へ上がるだけならばメイド試験に合格すればよかつたが、こいつの下に使えてへこへこするなんてまっぴらごめんだ。相手が王子だとそん

なものは関係ない。これは姉としての、シアン・ミストラルという人間としての意地なのだ。

だからわざわざ、向こうつから頭を下げて自分を招待せねばならなくなるほど力を付けた。決して楽な道ではなかつたが、彼女はついにやり遂げたのだ。先読みの魔女の名は、それほどどの価値がある。ただ、シアンの得意とする魔術は白の領域なので、城一つ飛ばすほどの攻撃魔法が本当に使えるかというと危ういところである。つまり、最後の台詞に関してはただのハッタリだったのだが。

「お、おい待て、話は……」

つかつかと出口へ向かいドアノブへ手を掛けた時に、戸惑つたままのクリスヴァインが声を掛けてきた。シアンは振り返つて、その顔は、地獄の門番も泣いてしまつほど恐ろしく、そして美しいものであった。

「私に用があるなら、あんたが私に尋ねてきなさい。」のむや

し

ぎり、と鋭い視線を残し、バタン、とすじこ音を立てて、ドアが閉められた。

部屋の中に、数秒の静寂が訪れる。クリスヴァインは顔を引きつらせながら、隣に立つてているディスを見た。もしかすると彼も、優しかった姉の変貌に困惑しているのではないか。

視線をやると、ディスは閉じられた扉をじっと見てから、

「さすが姉ちゃん、やるな」

そんな素つ頓狂なことを呟いて、にやりと笑つた。

クリスヴァインは信じられないといふように目を見開いてから、深い溜息を吐き、椅子に沈んだ。

頭の中で、彼女の言葉と、あの鋭すぎる視線がぐるぐる回る。たしか先読みの魔女は別名『慈愛の魔女』と呼ばれていたような気がするのだが。——一体何の間違いだ？

予想外すぎる展開に、クリスヴァインは額を掌で覆う。

今日掛けられた、と言つよりむしろぶちまけられた言葉の全ては

彼の言葉を抉った。しかし、一つだけ彼には納得できないことがある。

クリスヴィンは薄眼で天井を見、もつと溜息とともに、口を開いた。

「 もやし……だと……」

その日の夜、鏡の前で小一時間ぶつぶつ咳く半裸のクリスヴィンの姿を見たと、メイドの間で専らの噂になってしまったことを、まだ彼は知らない。

1 3 姉上様はかく語る（後編）

これにて1話はおしまいになります。

サブタイトルは姉の暴走です 笑

もしかするとかなり停滞したりもあるかもしれません、まだまだ

続く予感です。

コメントなどいただけた七崎がいやいやします。

読んでくださつてありがとうございました！

2 1 王子殿下はかく語る

「一体、なんだあいつは……」

クリスヴィン・アレリックは、執務室で頭を抱えていた。最近の悩みの種はもっぱら、魔術師であり、王子付き護衛騎士ディスの姉でもある、シアン・ミストラル嬢のことだった。

数日前にこの城に招かれた彼女は、まだ18というのに国中に名を馳せるほどの大魔術師であった。下々の噂によれば、災害によって傷ついた人々のことを助け、先読みによって幾度も人々を導いた、聖女のとき慈愛に満ちた人物であるという。その容姿はめったに見ることが叶わないが、目にしたもの皆がまるで女神か天使のようであつたと褒め称えるのだそうだ。

国民は皆、心優しい『先読みの魔女』に焦がれ、彼女をモデルにした本や寸劇なども存在するほどであった。クリスヴィンも、口にしたことこそなかつたが、彼女の噂を聞いてからは一目見てみたいと思つていたのだった。

それがまさか、あんな女とは。

「クリス、見ろよコレー、姉ちゃんが焼いてくれたクッキー！欲しいだろー？」

「いらん！そんな恐ろしいもの吃えるか！」

クリスヴィンが怒鳴るが、ディスは『そう？うまいのになー』とメイドの淹れたお茶を片手に、嬉しそうにクッキーを頬張つた。クリスヴィンとしてはそのような何を入れられたかわからないものを口にするなんて信じられないが、彼女は弟に対しては、というより自分以外に対しては良い人なのである。 腹の立つことに。

「姉ちゃんの作る料理は世界一うまいぜ？なんてつたつて俺の姉ちゃんだからな！」

「意味がわからん！　なんなんだあの女は！大体お前の話と全然違うだろが！どこが優しくて素敵な人なんだ！」

昔からディスの話の半分以上は、故郷に残してきたという姉のことだった。強く優しく美しい姉がどれほど素晴らしい人がということを、耳が痛くなるほど何度も何度も聞かされたものだ。

「優しいぜ？それに美人だったろ？」

ディスがにかつと笑うと、クリスヴィンは書類を捲る手を止め、渋い表情を作った。

「それはまあ、不細工とは言わんが……」

確かにシャン・ミストラルは美人だった。白金の髪は淡く煌めき、大きな緑の瞳はガラス球のように澄み切つている。その肌は白く、薄く光を纏っているのではと錯覚させるほど輝いて見えた。

クリスヴィンはこれまで美しい令嬢を腐るほど見てきたが、彼女ほど凛として、清らかな印象を与える者はなかなかいないだろう。かく言う自分も、はじめて彼女を目にした時は、思わず見入ってしまったものである。　まあすぐに、そのことを悔やみ深く後悔する羽目になつたのだが。

とはいっても、クリスヴィンは自分の非を認めていた。

影武者として城に迎えてからというもの、ディスのことは大変丁重に扱わせ、かつてでは考えられなかつたほどの自由を許すように言いつけた。自分もディスと同じだけ剣の練習に励み、毒の耐性を付け、周りが止めるのも気にせず友人のように振る舞つた。夜にはこつそりと部屋を抜け出したディスと、朝まで語らつたりしたものだ。生まれた時から『王子』であつたクリスヴィンにとって、それは新鮮で、孤独を埋めてくれるものだつた。ディスが御前試合に出たいと言つた時にも、反対派をねじ伏せてディスのしたいよつにさせてやつた。

しかし、彼女の言つているのはそんなことではないのだ。生まれながら『王子』として生きてきた自分は、他人に『与える』という

ことに慣れ過ぎてしまっていた。彼女に怒鳴られたあの日、友人と言いながら無意識のうちに自由を『与えた』つもりになっていた自分が恥ずかしくて堪らなかつた。そしてそのことをもし知つても、何の咎めもなく許してしまいそうなこの友人のことを思うと、吐き気がするほど自分が最低な人間に思えて仕方がなかつた。

クリスヴィンとて謝ろうと、思つてはいたのだ。

なのに彼女ときたら、彼の使うフォークを机に張り付けたり、靴の中に砂を入れたり、何故か自分のお茶にだけ塩が大量に入つていたり……。

「子供の悪戯か！年頃の女のすることは思えんぞ！」

実に幼稚でくだらない、しかし厄介な悪戯を毎日毎日ねちねちと、それも絶対に犯人が彼女だとばれない様に仕掛けてくるのだ。

「はは、俺たち孤児院育ちだからさー。そういうの得意なんだよ」

そう言えばディスも、いつもやけに要領よく部屋を抜け出して来ていた。孤児院を出た者は、皆あるのになつてしまふのだろうか。恐ろしい。王室育ちの自分には、到底わからない世界だ。

「もう嫌だ……なんとかしてくれ

クリスヴィンは視界を覆うと、情けない声を出し椅子に沈む。

あんなに嫌味な性格のくせに、彼女は何故かメイドや騎士たちからの評判がすこぶる良く、『本当にシャン様は素敵な方よね！』『女神のようなお方だわ』などと言われている。猫かぶりの上手い女である。腹立だしいことこの上ない。

「ちゃんと素直に謝つた方がいいよ。姉ちゃん1回怒ると、めちゃくちゃこえーから」

「それは、よくわかつた……」

もううんざりだというよつに眩いたクリスヴィンの顔には、疲労の影が浮かんでいる。

ディスが、ま、がんばれよ、と笑つて、最後の1かけを口に放り込んだ。

2.1 王子殿下はかく語る（後書き）

そういえば前回ナチュラルにもやしとかでできましたが、はたしてこの世界にもやしは存在するのか……？

あの女の態度は許し難い。幼稚で陰険で忌々しいことこの上ない態度だ。しかし、彼女の言い分はある一點を抜かせば最もだった。自分は断じてもやしではない。

クリスヴィンは天井を見上げて、はあ、と溜息を吐いた。

「謝るべき、なのだろうな」

誰にでもなくそうちごくと、彼はもう一つ息を吐いたのだった。

クリスヴィンはその日の夕、シャンの部屋の前に佇んでいた。王子として生まれてきだからというのも、命令することには慣れていったが個人的に人に謝ることなどほとんどなかつた。逆に、王子である以上必要以上に弱みを見せるな、常に堂々としているという教育を受けてきたのである。

王子殿下は今まで味わつたことのない種類の緊張を抱えて、迷いながらもドアをノックした。

「どうぞ」

誰かと問うこともなく、中からそう返つてくる。自分が今日訪れるることをもしかしたら知つていたのだろうか。『先読みの魔女』ならば、それも可能だろう。

「失礼する」

クリスヴィンがドアノブを捻り、中へ一步足を踏み入れた途端、

「っ！」

靴底がおもしろいほどすべり、足が宙に浮いた。

特殊な加工でも施したかのように異常につるつるに磨き上げられた床は、摩擦抵抗をものともせず革靴を華麗に受け流す。咄嗟にドアノブに手を伸ばすが時既に遅し。クリスヴィンは素つ頓狂な声を上げ、冷たい床にしたたかに尻を打ち付けた。ぐえ、と蛙が潰れる

ような声が彼の口から漏れる。

「　う、お、お前……！」

クリスヴィンが困惑しながらもシアンを睨んだ。　床が自然にこれほどの光沢を放つはずもない。何のつもりだ、と怒鳴ろうとしたその時、王子にひとつは残念なことに、廊下から『惑つた声が聞こえた。

「　お、王子……？」

クリスヴィンが顔を引きつらせたまま視線を上げると、ちょうど廊下を通りかかっていたメイドが困惑した表情を浮かべてこちらを見下ろしていた。

「　…………」

互いに見合いながら、硬直する。いつもなら『王子と田が合つちやつた！』なんてはしゃぐところだが、今の彼女にそんな頭はない。「ま……まさか転ばれて……だ、大丈夫ですか？　あ、私、医者を……」

「　…………」

わたわたと慌てるメイドから顔を逸らし、クリスヴィンは

「　いい、かまわん。下がれ」

とつけなく言った。眉間にいくら深いしわを刻みつけたところで、その頬は今羞恥でうつすら染まっている。

いきなり何もない（はず）のところで転んだのだ。しかもあるガラス細工のようだとか、人形のようだと言われている王子が。メイドははじめのうちこそ本気で慌てていたが、だんだん事態を理解してきたのか、次第にその口端にこらえきれない笑いを燻らせる。

「は、はい。……失礼いたします」

肩を震わせながら去っていくメイドを見て、クリスヴィンは頭を抱えた。

きっと明日には、メイドたちの間に広まっているのだろう。『え？ 王子が？』『そりやー！ 盛大に尻もちをついて、うろたえてらつしゃつたそよー』なんて会話をクリスヴィンが思い描いたかどうかは定かでないが、その顔は絶望に打ちひしがれていた。

「ふ、あははははは！」

諸悪の根源が悪魔の如き笑い声を上げるのが聞こえる。クリスヴィンは即座に立ち上がりと扉を閉め、シャンの座る椅子につかつかと近寄った。

「お前、一体何のつもりだ！これで明日から俺はメイドの笑い物だぞ！」

シャンは読んでいたらしい本を閉じると、ちつとも反省のうかがえない顔でクリスヴィンを見上げた。

「いいじゃない、メイドさんにだつて笑う権利くらいはあるわ」「誰がそんな話をしているか！俺は仮にも王子だぞ！？威儀とか、いろいろあるだろ？が！」

「このくらいでなくなる威儀なら、最初から壇にでもポイしちゃいなさい」

澄ました表情で、おどけたように彼女は言つ。

「な、なんて可愛くない女なのだろうか！」

クリスヴィンは白い頬を更に赤く染め憤慨した。怒れば怒るほどシャンが面白がるということに、未だ気づいていないようだ。

「それで？何か用かしら？」

シャンがこの前の自分と同じように、頬杖をついて言つ。いや、俺はあんなにふんぞり返りも、偉そうな態度も取らなかつたぞと苛立つたが、自分が何をしにここに来たかを思い出し、クリスヴィンはなんとか怒りを鎮めた。

「ぐ、その……」

クリスヴィンは言つてくそうに眉を寄せたが、拳を握ると、がばつと床と水平になるほど頭を下げた。

「すまなかつた。先日のそちらのお叱り、御尤もであつた。王子としてではなく、クリスヴィン・アレリックとして……貴女に礼が言いたい」

シャンは突然のことに驚いたように目を見開いて、頬杖を止めた。つむじが見えるほど腰を折るクリスヴィンを見遣つて、瞳を細める。

「お礼？」

謝罪ではなく？とシアンは訝しげな表情を作る。

クリスヴィンは頭を下げたまま、しばらく黙っていたが、やがて、
ああ、と押し殺したような声で答えた。

「貴方の弟君……ディス・ミストラルには、何度も救われた。
もちろん命もだが……ディスは、私の唯一心を許せる……友人、だ」
クリスヴィンが言って、また少しの沈黙が訪れる。

「顔を上げて」

シアンの静かな声に、ゆっくりと王子が顔を上げる。射抜くような視線を投げてくる彼女を回じく見返すと、クリスヴィンは続けた。

「私は生まれながらにして王子だった。王子というのは、人の上に立つものだ。決して弱音を吐いてはいけないし、特定のものと親しくすることも許されない。私の身分をうらやむものも多いし、実際恵まれているのだろうと思うが……それでも、私は孤独だった」

母は自分を生んですぐに死んだ。父は立派な王だったが顔を含わせることも少なく、どうしても自分の父という風には見られなかつた。厳格で正しい王。それがクリスヴァインの、父への印象だつた。

自分を取り巻くのは仕事として世話を焼くメイドと、国と王子を守るために存在する騎士。たまに顔を合わせる貴族たちも、領地拡大、婚約、ご機嫌取りと腹の中で渦巻いているのだろうと思うと吐き気がした。それは、まだ幼かつた自分には、少し重すぎる枷だつた。

「ディスが城に来た日のことは、今でもよく覚えている。潑刺とした元気な少年で、私とは全く対極にある者のように見えた」

これが自分の影武者だなんて、信じられなかつた。彼は、いつでも楽しそうに笑う、太陽のようだつたから。

「ディスが私と食い違うところの無いように」と、勉強も食事も、ほぼ1日中を共に過ごした。あいつは影武者としてももちろん立派にやつてくれたが……それ以上に私に友人として振る舞つてくれた。外を見たことのない私に、たくさんのこと教えてくれた。孤児院でのくだらない悪戯の話や草花の見分け方、それに 大半は、姉上殿、あなたの話だつた」

シアンは未だ微動だにせず、クリスヴァインの顔を見ている。彼は一度深く呼吸をし、そしてまた続けた。

「私は初めて聞く外の様子に心を躍らせ、家族というのに焦がれた。ディスの話はすべてが新鮮で、輝いて思えた。 私は、ディスのことを……羨ましいとまで思つていたんだ」

姉を語るディイスの顔は輝いて嬉しそうで、自分もその話に心を踊らせた。しかしそれと共に、僅かな、胸につかえるものも同時に感じた。

今ならわかる。あれはきっと、寂しさなのだらう。自分にとつてただ1人の親友にとつては、自分が1番でないことへの寂しさか、自分にはそのように語れる話が無いことへの寂しさか。もしかすると、その両方だったのかもしれない。

けれど、ディイスはいつも明るく、共にいると自分まで明るくなれるような気がした。一緒に背負ってくれる人がいるということが、これほど心を軽くするとは思わなかつた。彼の自由を奪つて、本来なら抱えなくても良かつたものを分かれ合つて、それでもディイスは、友人なら当たり前だと笑つて言つてくれた。たつた1人の家族に、会いたくないはずがなかつたのに。

「ディイスには、本当に救われた。かけがえのない友人と思つてゐる。ディイスの自由を奪つたことも、貴女の孤独を顧みずにいたことも、本当に……申し訳なかつた。けれど……酷い話だが、私は彼に会えたことを本当に、嬉しく思つてゐるんだ。あの頃も今も、ディイスがディイスであるのは、貴女のおかげなのだろうな。勝手な話だが……貴女に礼が言いたい。ディイスに会わせててくれて、あらがとう」

そう言つてクリスヴィンは一瞬目元を和らげると、嬉しさと悲しさが混じつて出来そこなつた笑顔のようなものを浮かべる。

シアンはそんな彼を見てびっくりと眉を動かし、それからゆつくりと唇を開くと、ぽつりと落とすように言つた。

「あなたにお礼を言われる筋合いはないわ

「ああ、そうだろうな」

彼女の硬い声に、クリスヴィンは自嘲めいた表情で、僅かに唇の端を上げる。

当然の報いだろう。これくらい言われないといけないのだ。

影武者の存在を知つてゐるものは皆、それは王子である自分た

めには必要な犠牲で、王子とそのほかの人間では命の重さが違うのだ、と言つた。殿下は自分の身を自分で守れる自信がありますか、貴方の身体は、貴方だけの物ではないのですよ、と。

そして張本人であるディスは、決して自分のことを責めなかつた。いつだつて彼は笑うのだ。友達だつたら当たり前だろ、と言つて。

自分に、彼と友人である資格などあるのだろうか。

「ディスが」

突然落とされたシアンの声に、クリスヴィンは顔を上げる。目が合うと彼女はなにか神妙な面持ちでじつとこちらを見てから、唇を開いた。

「ディスがあなたのこと……褒めてたわ。ちょっとお堅いけど、いい奴だつて。いろいろあつたけど、あなたと会えてよかつたつて」「ディス……」

クリスヴィンは拳を握りしめた。　彼はなんて優しいのだろうか。こんな自分にも、そんな言葉を掛けてくれるなんて。

クリスヴィンがそんなことを考えていると、シアンが眉を寄せた。「ちょっと、あんたバカじゃないの？ディスが同情とか、そんな気持ちでこんなこと言うつと思つてる？」

クリスヴィンが固まっていると、シアンは更にむつとして腕を組む。

「ディスは人を心配させないためにオブラーートに包むくらいはするけど、嘘は付かない子よ。あなただつてわかるでしょ？」

強い翠に見つめられ、クリスヴィンは目を見開く。

初めて、嬉しさと情けなさで泣きたくなつた。彼は自分の威厳に掛けて決してそのよつな真似はしなかつたが、なんとか、ああ、とだけ答えて俯いた。

「そうだな……私は自分だけでなく、ディスのことまで侮つていたようだ。彼は、俺の……大切な友人だ」

再び顔を上げたクリスヴィンは、ぎこちなく、しかしどこか晴れやかな笑みを浮かべていた。

その顔を見て、シアンは眉を僅かに動かす。

この男が、型どおりの王子殿下などだったら怒鳴り散らして引きずり下ろして、死ぬより痛い目見せてやるつと思つていたのだけれど。

彼女は少し考えてから、諦めたように一つ息を吐いた。

「まあ……あんたも反省してるみたいだし、もういいわ。私もちょっと言い過ぎた感あるし……悪かったわね」

シアンはそう言つて、ふつと視線を逸らした。

「は……？」

もしかして今、謝ったのか……？クリスヴァインが目を見開いたまま硬直していると、シアンはむつと口を曲げる。

「なによ、私だって謝ることくらいあるわよ。あの時は長年の苛立ちをぶちまけたかっただけ。ま、反省したなんならいいわ。お互いまに流しましょ？」

いつまでもふんぞり返つてゐるような奴なら容赦はしなかつたけどね、と付け加えて、彼女は意外なほどあっさりと表情を緩めた。

クリスヴァインとしては、『今すぐ土下座して靴を舐めなさい頭踏ませなさいひれ伏しなさい』くらい言われるのではと氣負つて來たので、なんだか拍子抜けしてしまつ。

そんなことを考えていると、

「別に、許してほしくないんならそれでもいいのよ？」

顔に出ていたのだろうか、彼女がにやりと笑つたので慌てて手を振つた。

「いや、そんなことはない。……ありがと」

クリスヴァインが言つと、シアンはふふ、と笑いを漏らして立ち上がりつた。

「美味しいお茶があるの。クッキーも焼いたし、よかつたら一緒にどう？」

既に用意をしながら言つ彼女の胸にはクリスヴァインが断るという

選択肢はないようだ。強引な女である。

しかしその顔は、ディスに聞かれていたように、優しく美しい笑みをたたえていた。

「ああ……ありがと」

昼夜下がりのあたたかい陽気が惜しみなく注がれる中、クリスマスワインは少しだけ微笑んだ。

こんな、清々しい気分はいつ以来だろうか。
クリスマスワインはゆるく笑みを浮かべて、彼女が勧めてくれたクッキーを一口かじり、そして……

「か、からああああああつ！」

激辛だった。大急ぎでお茶を口に入れると、今度は 激苦だった。

「う、うええ……」

「あはははははは！」

思わず口に含んだお茶を、カップの中に吐きだしてしまった。汚いとか思わないでほしい、床にぶちまけなかつただけ上出来だ。

「な、な、おま、なんのつもりら！」

回らない舌に半泣きという情けない様子でクリスマスワインが睨みつけると、彼女は心の底から楽しそうに笑った。

「だって、あなたからかうのおもしろいんだもん！」

天使のような笑顔で、悪魔のようなことをのたまつた。

「ふ、ふざけるな！」

信じた自分が馬鹿だったのか？これが素晴らしい姉で、世纪の大魔術師だと！？

もう嫌だ……と頭を抱えた彼に、シアンは憎たらしいほど美しい笑みで言った。

「これからもよろしくね、クリスマスワイン」

王子の受難は、まだまだ続きやつである。

2 3 ハニーディーはかく語る（後書き）

これにて2話はおしまいです。ここで終わるはずだったんですが、まだ姉様が王子で遊び足りないって言つので続きます。毎日更新とはいからいかもしれないですが、がんばって書いていくのでよろしくお願いします！

姉様と王子に拍手してくださいの方、ありがとうございます！王子はこれからも不憚な田舎の王子なので、よかつたら応援してやってください
さいへへ笑
ありがとうございました！

3.1 王子殿のお仕事

「ディイス、まだ玉ねぎ嫌いなの? ひよつとは食べないとダメよ。ほら」

「うえー、姉ちやんにあげる」

「うひ、人の皿に寄越さないのーはー、口あけて」

「うー、へーい……」

「…………」

「姉ちやん姉ちやん、これ町で見つけただけど、姉ちやんに似合うと思つてー」

「え、くれるの? ありがとうディイス、お礼にケーキでも焼くわ」

「やつたー、俺チヨコのがいいー」

「チヨコね、わかつた。あとで届けましょうか?」

「ううん、俺もついてくー!」

「そう? ふふ、じゃあ一緒に作りましょ」

「うんー!」

「…………」

「あ、ディイスお帰りー」

「姉ちやん、また俺の部屋勝手に入つて……」この辺男ばっかりなんだから、あんまり夜遅くに来たらダメって言つたじやん

「私を誰だと思ってるの? 大丈夫よ」

「俺が心配なのーこれからは俺が迎えに行くまでちやんと待つて」

「えー、でもディイスに早く会いたいんだもん」

「む……」

「こいでしょ? ディイス」

「…………わかったよ。……でも、頼むから氣をつけて来てね
「まかせなさい」

「…………ねい」

沼の底から聞こえてくるような押しつぶされた声に、シアンとディスが、なに？と顔を上げる。その視線の先には、整った顔を恐ろしく歪めて、大変怒つておられるクリスヴィン。

「お前ら…………いつもいつも人の目の前でベタベタベタベタと、一体何なのだ！おかしな噂を立てられたくなれば、もう少し姉弟らしい振る舞いをしろ！」

額にぴきっと青筋を浮かべて、眉を吊り上げたクリスヴィンが憤慨する。

重要人物であるシアンと、自分の警護をしているディス、3人でいる時間が必然的に長くなってしまうのは、仕方ないことだと理解している。

しかしこうも毎日人の目の前でベタベタベタされでは、さすがにクリスヴィンとて居辛いことこの上ないというものだ。何故自分が執務室で、自分がこんなにも疎外感を味わわなくてはならないのか。

クリスヴィンの言葉に、シアンは美しい眉をほんの少し寄せた。
「はあ、嫌だわ。私たちの姉弟愛を、そんな汚らわしい目で見ないでくれるかしら？」

彼女は軽蔑するようなまなざしをクリスヴィンに向けると、『ディスはあんな穢れた人間になつてはダメよ？』などと弟に言い聞かせている。しかもディスも『うん、わかったよねーちゃん』などとにこにこ笑っているではないか。

「ディス、お前一体どちらの味方なんだ！」

クリスヴィンが拳を震わせてそう問うと、彼の唯一無二の親友、ディスはきょとんとクリスヴィンを見て、

「姉ちゃん！」

満面の笑みで答えた。

「…………」

そんな質問するなんてみみっちい男ね、と言つシャンの声もおぼろげに、クリスヴィンは絶望に打ちひしがれた。

今やこの城に自分の味方など、1人もいないのではないか？
クリスヴィンは一人執務をこなしながら、うおおと頭をかきむし
つた。

城中のメイドに憧れのまなざしを注がれ、城中の騎士にちやほや
されて。あの女はいつの間にか、城中を掌握しているようにさえ見
えてきた。

「…………はあ」

クリスヴィンはペンを置くと、椅子に深くもたれかかった。

こんなことを考えていても仕方がない。さつさと仕事を終え
てしまわねば。

クリスヴィンは重い身体を起こすと、いくら書いても減らない書
類の山に再び手を付けた。

「クリス、最近ちゃんと寝てるか？」

ディスは食事にも来ず、執務室にこもりっぱなしのクリスヴィン
の顔を見つめて心配そうに呟いた。

クリスヴィンの父は大変厳格で、それまでにあつた貴族の横領や
官吏たちの不正を、かなり厳しく取り締まつた人であった。当然貴
族たちからはやつかまれていたが、民衆からは大変支持されていた。
クリスヴィンは彼の父ほど重圧を感じさせるようなオーラを纏つ
てはいなかつたが、彼もまた不正を許せない性質である。そして自
分にも厳しいので、いつも仕事が溜まると執務室から1歩も動かな
くなるのだ。

民衆の理想の王であつた彼の父、その子供にのしかかる期待は、前代以上に重いものである。クリスヴィンはいつだかディスに、『國民が期待してくれているなんて、王子として誇らしいことではないか。私はその期待を超えるよう、努力するだけだ』と言つたことがある。しかしディスは、幼い頃の彼が毎晩のようにうなされ、体調を崩していたこともまた知つているのだ。彼の肩にのしかかるものの重さは、いくら元影武者とはいえ、自分には一生理解できないものなのだろう。

「クリス、ちょっとは休まないとダメだぞ」

ディスがそう言つと、クリスヴィンはつらすらとクマを作つた顔を上げる。

「いや、まだ平氣だ。今日中にこの書類を書き終えてしまいたいのでな」

クリスヴィンはゆるく微笑むと、再びペンを動かし始める。このようなやり取りは今まで何度も行つてきたが、クリスヴィンが大人しく休んでくれたことは一度もなかつた。

「んー……じゃあ、なんかせめて食つてよ。甘いものでも持つてこようか?」

ディスは心配そうな顔でクリスを見る。クリスヴィンは、いや大丈夫だ、と断ろうとして、

「ああ、頼む」

ディスと目が合うと少し考えてからそう言つた。 倒れてしまつては元も子もないのだ。腹が空かずとも、多少のエネルギーは摂つておかねばなるまい。

「おつけー。ちょっと待つてろな!」

どこか意味深な笑みを残して部屋を後にしたディスを見て、クリスヴィンはなんとなくいやな予感がした。

「はるークリスヴィン」

そしてその予感は大的中した。戻ってきたディスはティーカップと菓子だけでなく、何故か姉まで伴っていた。

「な……」

「あら、随分景気悪い顔してるわね。死人みたいよ」

そんな失礼なことを言うと、彼女はよいしょ、と我が物顔でソファに腰掛けた。ティーカップと焼きたてのシフォンケーキが、机の上に並べられる。

「さ、早くお茶にしましょ」

「わーい」

シアンの横にディスも座ると、2人してクリスヴィンの方を見てくる。

「お前の作ったものなんて食えるか！何が入っているか考えただけでも恐ろしい」

クリスヴィンが忌々しげに言つと、シアンはふつと目を細めた。

「あら、そんなに期待されたら答えたくなっちゃうじゃない」

「期待などするか！」

思わず大声で叫んだせいで、頭がくらくらする。やはり、寝不足なのだろうか。

そんなクリスヴィンを見て、ディスは、ははと笑った。

「クリスー、本当に睡眠薬とか入れられたらくなかったら、早くこっち来た方がいいぜ」

「うふふ」

隣でシアンが完璧に美しい笑みを浮かべる。 やりかねない、この女ならやりかねない。

クリスヴィンは仕方なく重い腰を上げると、2人の向かい側にどかつと座った。

「ほら、これで満足か！？」

「はーい、よくできました」

シアンが小さい子にするより、ぱちぱちと手を叩いてくる。クリスヴァインは、ふざけるな、と怒鳴りうとしたが、これ以上余計な体力を使うのも面倒になつて止めておいた。

「…………」

「……なんだ」

シアンはクリスヴァインを見て少し何か考えるような素振りを見せたが、

「んー、別に」

そう言つて、いただきまーす、とお茶を口にした。

ディスはお菓子をもごもごと頬張つて、『やっぱねーちゃんの作つたのが一番だな!』『あらあらうふふ』なんて茶番を繰り広げている。

そんな2人を横目にクリスヴァインはうざりしながらお茶を一口飲んで、

「…………」

不思議そうにカップの中を眺めた。

「もしかして初めて飲んだ？私たちの故郷の特産品なんだけど、良い香りでしょ？」

こつちに来る時持つてきたの、とシアンが言つて、
「いや、これなら以前ディスに飲ませてもらつたことがある」とクリスヴァインが首を振つた。

「あら、そうなの？」

「うん、前姉ちゃんが送つてくれたのあげたんだ」

ディスの言葉に、シアンはなるほどね、と頷いた。文通しかできなかつた10年ほどの間、2人は物を送り合つたりすることも多かつたのだ。

クリスヴァインはもう一口お茶を含んで、それから疑わしげに眉を寄せた。

「お前、何か入れたのか?」

「……………あら」

クリスヴィンの言葉にシアンは少し驚いてみせて、それからふつん、と彼のことを見つめた。

「あなた意外と鋭いのね」

感心感心、と頷くシアン。クリスヴィンは『お前一体なにを…!』と怒鳴ろうとしたが、彼女はそれを遮つて言った。

「別に何も入つてないわ。ただちょっとカップにまじないがしてあるだけ」

「まじない?」

「そ、ちょっとしたおまじないよ」

クリスヴィンとディイスが彼女の顔を見て、続いてカップに視線を落とす。特に変わったところはないように思えるが、と2人が首を傾げるのを見て、シアンは笑つた。

「目に見えるものじゃないわ。ちなみにクリスのは縁、ディイスのは赤、私のは黄色のまじないよ」

「え、俺のにも? ゼンツゼンわかんねーや」

ディイスが空になつたカップを手の中でぐるぐる回してみると、やはりただのカップだ。

「普通はわからないものよ。クリスはちょっと神経質なのね」

「あー、たしかにきつちりしてんの好きだよなー。蜜柑のすじとか、魚の小骨も全部きつちり取り除くタイプ?」

「やーね、男なら鶏だらうと魚だらうと頭から尻尾までバリバリ食べなさい」

「俺を殺す気か!?」

どう考へても喉に刺さる。そんな間抜けな死に方は絶対御免だ。

王室と言つるのは時折おかしな人が生まれるもので、痴情のもつれの後女に刺されて死んだり、ある日自分は本当は魚なんだと言い張つて海に飛び込みおぼれ死んだ先祖もいる。そんな彼らと自分がひとまとめにされるなど、考えただけで恐ろしい。

「それで、黄色とか緑とか、一体何のことだ?」

だんだん面倒になつてきたクリスヴィンがため息交じりに聞くと、シアンは少し考えてから、机の上に指でぐるりと円を描いた。その指先から白い光が漏れて、淡く光りだす。

驚いた顔をするクリスヴィンに『あら、魔術を見るのは初めて?』と笑つて、シアンは円の中心を通るように線を引き、その両端に『白』『黒』と文字を描く。

「魔術の基本は白と黒。この2つは対極にあって、白は未来を、黒は過去を司っている。私は『先読みの魔女』って呼ばれてるけど、それはただの通り名で、魔術師的に言つと『白の魔術師』ね」続いてシアンは、円を6等分するように、更に2本線を引く。また白い光が溢れ、机の上に文字を残した。

「そして白と黒を基本に、魔術は6つの領分に別れるの。この白に近い方が緑と黄色。緑は森と安息を、黄色は大地と知識を司るわ。そして黒に近いのが繁栄と炎の赤と、水と変化を司る青。対極にある領分操るのは難しいけど、隣り合つものくらいならひょっと上級の魔術師になると使えたりするものよ。」

ということは、白の魔術師である彼女が赤のまじないをしたといふのは、かなりすごいことなのではないだろつか。やはり先読みの魔女の名は伊達ではないということか。

シアンの話を黙つて聞いていたディスが、カップを片手に首を傾げた。

「えーっと、じゃあ俺はなんか繁栄するつてこと?」

シアンは少し笑つて、

「そんなにすごいものじゃないわ、ちょっととした景気づけみたいなものよ。ディスはいつもよりちょっと疲れにくかったり、クリスは身体が安まつたり、私は少し頭がすつきりする、そんな程度のもの。あまり強すぎる魔術には、いろいろな制約がもたらされるものだか

ら

そう言って机の上の文字を掌でふき取るようにする。すると淡い

光はすうっと消え、元通りの美しい木目が現れた。

「う、うわー、すげー！魔法じゃん魔法！姉ちゃん本当に魔術師なんだなー！」

「あつたり前よ、私の努力と天賦の才を舐めないで頂戴？」
ちょっと悪戯っぽく笑って、でもこれくらいのことならまだ序の口よ?と彼女は言った。

「なんだか本当に身体が軽くなつた気がするな
お茶を終えて、ソファの上でクリスヴィンが肩を押さえながら言
つた。バキバキに凝り固まつていた筋肉が、少しほぐれたような気
がする。

「私にかかるばこれくらい朝飯前よ。あつたかいもの飲むこと自体
もいいんでしょうしね」

シャーンはティー・ポットを下げ、ソファの上でくつろぎながら言う。
「そうそう、クリスもこれからはちゃんと休息どんなきやダメだか
らな? バシッと休んで、ビシッと仕事する、これが出来る王子様つ
てな」

にかつと笑つたディスにクリスは『ああ』と返事をして、それから

「.....」

「クリス?」

かくん、と首を折つた。

「え、クリスどうしたんだよ?」

慌ててディスがクリス、ヴィンに近寄り、顔を覗き込むと
スヴィンはうつすらと息を立て、眠つていた。

「あれ? ク里斯?」

不思議そうに田を見開くディスの後ろで、シャーンが椅子から立ち
上がり、

「あら、もう寝ちゃつたの?
事もなさげにそう言つた。

「姉ちゃん、なんか盛つた?」

ディスがたおやかな笑みを浮かべる姉を見上げてそう聞くと、彼
女はいやいやと首を振つた。

「盛つてないわ。ちょっと……まじないを、ね?」

姉の言葉にディスが首を傾げる。

「どうこと？」

「緑の領分にもいろいろあるのよ。クリスのカップに掛けたのは、身体の疲れを取るまじない。でもクリスのフォークに掛かつてたのは、睡眠を促進するまじない」

姉の言葉にディスは苦笑いする、かと思いきや、

「すげー、そんなこともできんの？さすが姉ちゃんはすげーな！」
はしゃぎながらそんなことを言つた。クリスヴィンが起きていた
としたら、身体の不調も忘れて怒鳴り散らしているところである。

「まーね。彼、そろそろ限界だつたし」

姉の言葉にディスが再び首を傾げる。たしかにクリスヴィンは働き過ぎだとは思うが、普段からこんな調子だ。

シアンは僅かに目を細めて、弟に微笑んだ。

「黄色と緑の領分に精通していればわかるけど、精力の巡りが悪くなつてたのよ。このままじゃもうすぐぶつ倒れるところだつたわ」

「そつかー。ありがとな、ねーちゃん」

ディスはクリスヴィンを見て苦笑を漏らした。本当に、仕事に関してはかなり優秀なのに、困った王子様だ。

シアンはそんな弟の姿に小さな笑みを漏らすと、クリスヴィンの書き物机の上に乗つている、大量の書類に目をやつた。

「ふむ……なるほど。これくらいなら私にも理解出来るわ
ぱらぱらと捲つて、シアンは頷く。

「あ、俺もやるー昔はクリスの振りしていろいろやりつてたし、結構計算どかも得意だよ」

「そうね、じゃあ一緒にやりましょ」

類稀なる才能の持ち主である姉と弟は簡単にそう言つて、取りあえずクリスヴィンを寝室に運んでから仕事をすることにした。

ディスが易々とクリスヴィンを抱えて運び（ちなみにお姫様抱っこと呼ばれる類のものだったので、後にメイドたちの間で大変噂になってしまった）、彼をベッドの上へと下ろした。

普段眠りの浅い彼がここまで深く眠っているのを見るのは久しぶりのことだった。

白い肌に、瘦せて少しばかりやつれ、しかしそれすら儂げに見せる、纖細そうな面持ち。

シャンはそっとクリスの顔を覗き込んだ。『高貴な王子様』もこうして目を閉じていると、彼もまた自分と歳の変わらない、ほんの子供であるということがよくわかる。

ディスも姉の横からクリス・ヴィンを覗き込み、安らかな彼の寝顔を眺めた。

「よく寝てるな」

「よく寝てるわね」

2人は顔を見合わせると、どちらからともなく子供のよつな、まだ2人が孤児院にいたころとまったく同じ、悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「おーお前りああーーこれは一体どうこうことだー!? 消せー! 今すぐ消せー!」

「ぶあつはつはつはつはつはー!」

「あははははははー!」

数時間後、目が4つになつたりひげが生えたり額に謎のマークが描かれたりしたクリス・ヴィンが部屋に駆け込んできたのだが、その道中で彼が誰かに目撃されなかつたかというと……それはまた、別の話である。

3.3 ハニーハニ王子殿のお仕事（後書き）

これにて3話は終了です。

あくまで自分比ですが、たくさんの方に読んでいただけて本当にうれしいです！ありがとうございます！

読者さまは一体誰を気に入ってくれているのか、とか、今のところ王子に見せ場はない気がするけどそれってどうなの？とか思うところはあります……彼らの魅力を引き出していけるように頑張りたいと思います。

よろしければこれからもお付き合ください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3828y/>

姉上様の謀略

2011年11月19日19時52分発行